文芸

みどうの杜俳句会

秩父路の隈なく晴れて山笑ふ　佐山けさ子

前山の雑木の伸びて暖かし　高橋　きみ

部屋に射す日に背を向けて暖かし　鈴木　啓子

やぶ椿風にあほられ葉のひかる　木本　弘子

我庭の水仙一寸程に伸び　田村　好子

道端の名もなき木木の芽吹き初め　西　ツル

春寒や退院を待つ誕生日　吉田　愛子

こもれ日の寸時の暇や日向ぼこ　今村千鶴子

春寒や背中に風の通り過ぐ　飯野はつ志

株に差し座敷の隅に団子花　梅沢きくえ

晴れ渡りろう梅二本香り良し　馬場　芳

寒鴉山の墓所に鳴き止まず　山崎　才子

通ひ路の土手白梅のひらき初む　高橋　ツ子

紅梅の一樹や渓沿ひ停留所　中村　けん

真つ白に凍てて峠の上り下り　岩崎　真人

秩父路の山山春の雪積もる　小林　和幸

春一番洗濯ハンガー吹かれ落つ　野口利江子

冬菜畑虫喰ひの葉の網の様　関口　佝子

おしるこの小豆ほっぺに頬張る子　神田　昌美

渓谷の崖に張り出し冬紅葉　土屋　厚子

薄日差す寺庭牡丹冬芽立つ　初雁　功子

大株の白菜包み新聞紙　岡部冨美子

青銅の御仏へ舞ひ雪蛍　山田　美子

白石短歌会

負け犬の遠吠えみたいな激論を親娘で交すコロナ禍の夜　渡邉美枝子

友の呉れし花の命を絶やさじと種蒔き種とりそして種蒔く　坂本　美江

春迎え庭のそちこち草や花芽を出しそれぞれ思い出を呼ぶ　白石　礼子

香のゆかし無数の白き小花ゆれ天女の如し羽衣ジャスミン　渡邉阿里子

人権シリーズ 378

『言葉の大切さ』

「おはよう」「こんにちは」挨拶というのは、小さな言葉であるかもしれません。私は、その小さな言葉一つひとつで挨拶の輪が広がり、人と心が打ち解け合い、理解し合えることもあるのではないかと思います。

しかし、相手を傷つけることもあるのが言葉です。障害の有無に関係なく、ばかにされた時や、変な目で見られた時、心ないことを言われた時は、とても悲しくなります。しかし、そこでばかにしてきた人を憎むのではなく、「このような考え方をする人もいるのか」「自分のことを知ってもらえて良かった」と思うのはどうでしょうか。人を喜ばせるのも言葉、人を傷つけるのも言葉です。

人と会うことや、人とのコミュニケーションが減ってきているのが今の時代です。

小さな言葉でも「安心できる」「ほっとできる」そのような言葉がけができたらと思います。

東秩父村身体障害者福祉会長　山崎　良一